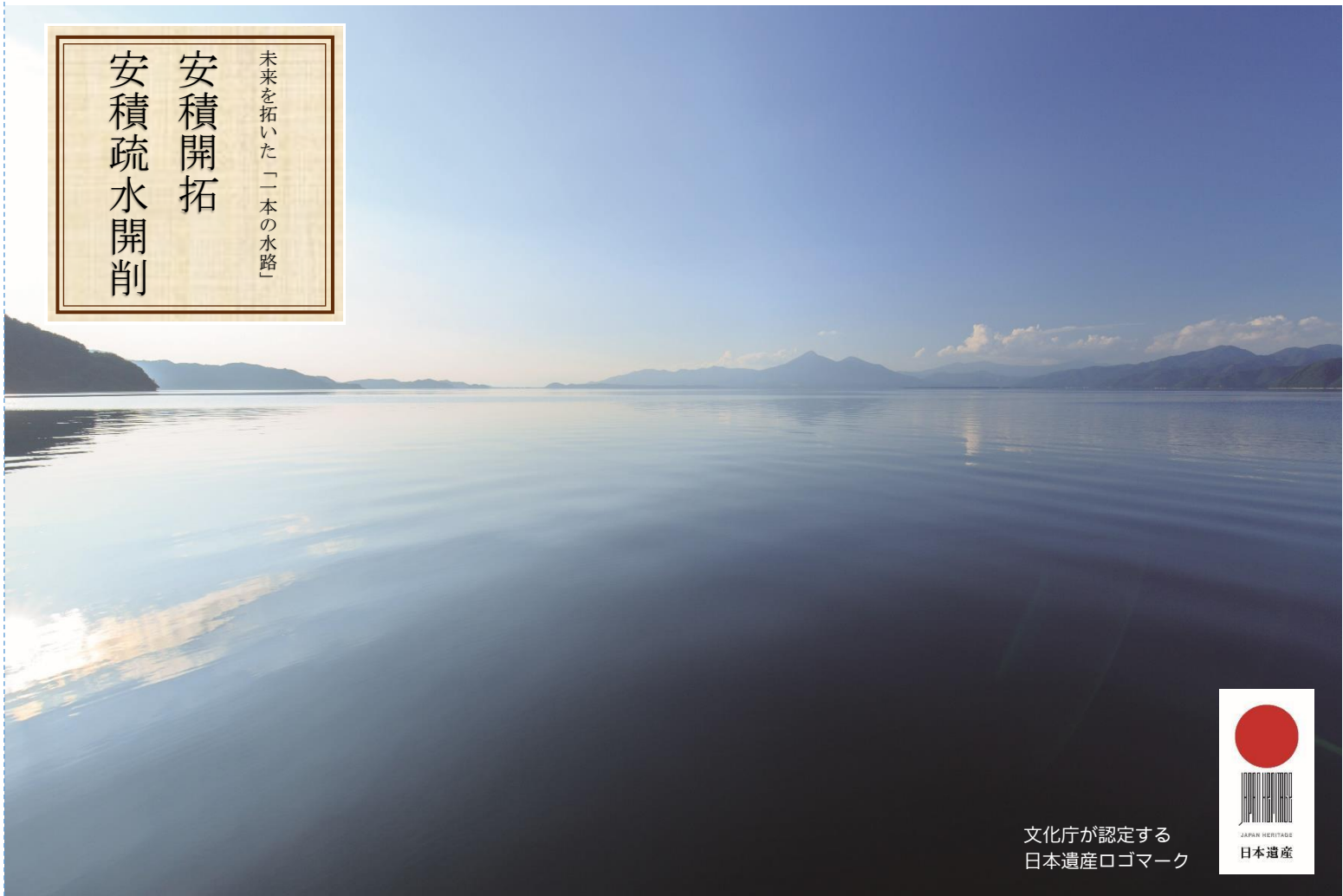




文化庁が認定する
日本遺産ロゴマーク



未来を拓いた「一本の水路」
安積開拓
安積疏水開削

高まる情熱、動き出した 奇跡の開拓事業

明治維新後、武士の救済と、新産業による近代化を進めるため、安積地方の開拓に並々ならぬ想いを抱いていた大久保利通。

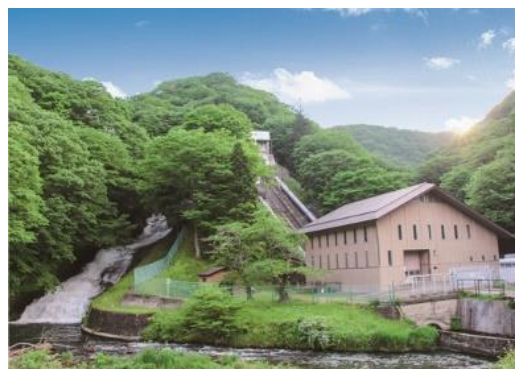
夢半ばで倒れた彼の想いは、郡山から西の天空にある猪苗代湖より水を引く「安積開拓・安積疏水開削事業」で実現した。

奥羽山脈を突き抜け約130kmに及ぶ「一本の水路」は、外国の最新技術の導入、そして、この地域と全国から人・モノ・技を集集し、延べ85万人とともに苦難を乗り越え、3年の時を経て完成。

この明治政府初の国营農業水利事業は、猪苗代湖の水を治め、米や鯉など食文化を豊かにし、さらには水力発電による紡績等の新たな産業の発展をもたらした。未来を拓いた「一本の水路」は、多様性と調和し共生する風土と、開拓者の未来を想う心、その想いが込められた桜とともに、今なおこの地に受け継がれている。これら地域のストーリーは、2016（平成28）年に日本遺産に認定された。



日本三大疏水のうち最初に実施された安積疏水開削事業により造られた水路。熱海町を通る一級河川「五百川」の流れを利用し水を運ぶ。



1899（明治32）年に稼働した沼上発電所。水源である猪苗代湖との落差を利用した水力発電所。国内初の長距離高圧送電に成功。



安積疏水の完成により使われなくなった溜池を利用し盛んになった鯉の養殖。

開拓者の想い 未来に花咲く

開拓時代に植えられた
桜により県内屈指の
花どころとなる



安積開拓を進めた「開成社」では、苦難が伴う開拓を進めた人々の心を和ませるため、開成山をはじめ、池や道路の周りにも「花木幾万」を植えることを定め、1878（明治11）年から植栽を行った。

灌漑用の沼の堤に桜などを約四千本植え、これらの桜は成長すると美しい花を咲かせ、明治後半には県内屈指の花どころとなった。

その後、桜の木は見事な大木となり、1934（昭和9）年には国の史蹟名勝天然記念物に指定されるほどに至った（現在は解除）。



1873（明治6）年、県の開拓に呼応し地元商人たちで結成された開成社。社則には、開拓を進めた池や道路沿いに花木を植えることが定められていた。

開成社の記録には「私たちの代では小さな苗木でも、やがて大樹となり、美しい花は人々の心を和ませるであろう。」との一文があり、当時の開拓者による次世代への想いを伺い知ることができる。

日本最古の 染井吉野

文献と調査結果で
証明された桜の価値



140年以上、開拓の心を伝え続ける染井吉野。

「染井吉野」は江戸時代末期に染井村（現在の東京都豊島区）から供給され広まった単一クローンの栽培品種で、元々一つだった木から挿し木や接ぎ木で増やした品種。

花期に葉がなく成育も早いことから、明治期に全国に広まった。

これまで、日本最古とされていた弘前の染井吉野は、1882（明治15）年に植えたとされていた。

一方、開成山公園内にある染井吉野の一部は、1878（明治11）年に開成社で植えたとの文献が残っていた。

樹齢140年を超える染井吉野は稀で、文献どおりであれば大変貴重なことから、それらを証明するため科学的調査を実施。

調査の結果、開成山公園内にある染井吉野は当時植えられたことが証明され、さらには2019年、樹木医学会の学会誌で、日本最古であることが認められた。

日本に咲くサクラの約8割は染井吉野とされている。その中でも、現存する染井吉野の幹として一番古いものが郡山の地で今もなお咲き誇り、人々の心を和ませてくれている。



2016（平成28）年に実施された染井吉野の樹齢調査。放射性炭素年代測定のための木材採取の様子。